

Ⅲ-1. ハワイでのカヌー文化・伝統的航海術の歴史と継承

(1)ホクレア号：マラマ・ホヌア地球をいたわる(Höküle 'a: Mālama Honua)

ポリネシア航海協会 カイウラニ・マーフィー
(Ka'iulani Murphy)

(司会)

第3部のほうに入っていきたいと思います。

第3部の講演者は、ハワイからいらっしゃいましたカイウラニ・マーフィーさんです。カイウラニさんは、現在、ハワイのポリネシア航海協会に属しております、先ほど出ましたマウ・ピアイルクさんのお弟子さんのナイノア・トンプソンさんが航海士になって、その後に第2世代の方々を育てて、その人たちが中心になって2007年、沖縄や日本に航海が行われたのですが、私の理解では、その次の第3世代くらいに当たると思います。今、最も中心的に活躍されている女性の航海士でございます。ハワイ大学でもハワイ文化を教えていると聞いております。

それでは、カイウラニさん、よろしくお願いいたします。



(カイウラニ・マーフィー)

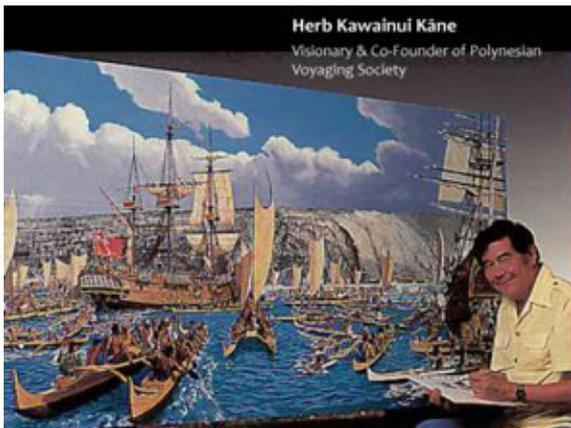
まず、マハロ（ありがとう）と申し上げます。ご招待をいただき、今日この場にお招きいただいております。みなさんと一緒にこのイベントに参加をさせていただき、光栄に思います。私が幸運にもホクレア号の学び手として勉強したことをみなさんにお伝えしたいと思います。須藤先生のほうから、素晴らしいホクレア号紹介の話がございましたので、そのところについては、手短に触れたいと思います。



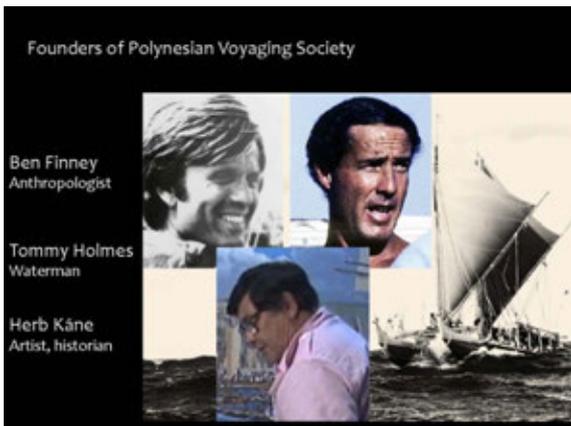
ホクレア号の世界周航航路

ホクレア号は、現在、3年間の世界周航に出て、地球という島をめぐる旅を続けています。今回の旅の名前はマラマ・ホヌアと言いまして、ハワイ語で“地球をいたわる”という意味です。4万7,000海里的距離を旅し、85の港、26の国を訪問しています。沖縄や日本は今回は含まれていませんが、9年前は沖縄、日本にホクレア号がやってまいりました。

この3年間の世界就航は、ホクレア号が旅をするに当たって、天候などを踏まえた上で、安全に航海できることを第一にしています。そして、使命



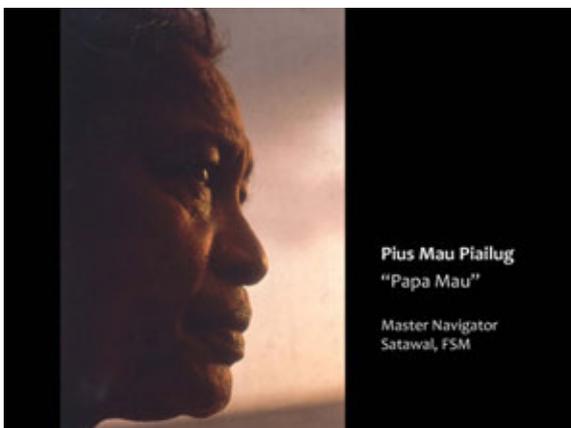
ホクレア号をデザインしたハーブ・カネ



ポリネシア航海協会の創設者たち



1975年のホクレア号の進水式



パパマウと呼ばれたマウ・ピアイルク

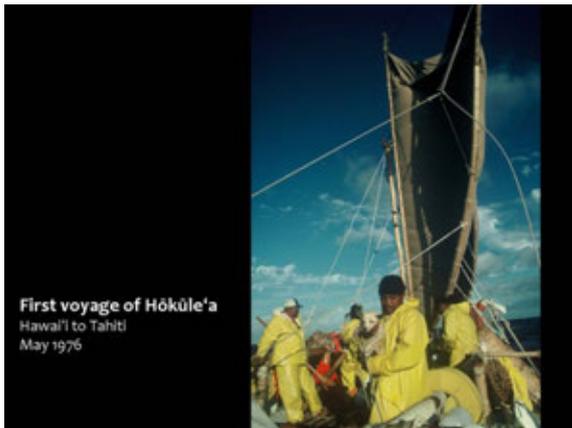
の一つとして、今まで訪れていない場所、訪れたことがあるけれどもう一度つながる必要がある場所を選びました。

現在の旅のお話をする前に、ホクレア号にまつわる話について、長い話ではありますが、私に与えられた時間で何とかまとめたいと思います。通訳の方に早口でしゃべっていただくことになり、申し訳なくなるかもしれませんが。

まず何名かの方について触れたいと思います。ハーブ・カネ、先ほどの話にも出てきましたが、カネが、壮大な夢、将来に向けての展望を抱いてポリネシア航海協会を設立しました。そして私達の母なる航海カヌー「ホクレア号」をデザインし、造りました。彼以外にも、ベン・フィニーという人類学者、それから、ハワイのウォーターマンとして知られているトミー・ホームズが、1973年にポリネシア航海協会を設立しました。

過去何百年もの間いろいろな理由があり、航海カヌーは造られていませんでした。だからこそホクレア号はとても大切な現代版の外洋航海カヌーです。1975年に600年という空白の時を経てホクレア号は建造されました。1975年3月8日にオアフ島のハキプウとクアロアという二つのアプアア（ハワイでの元々の土地利用単位）で進水し、昨年40周年を迎えました。

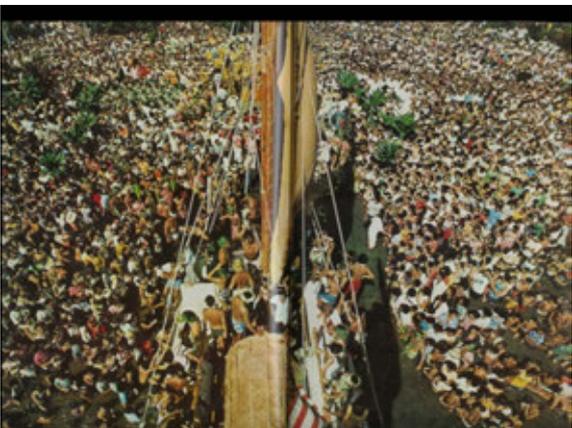
ホクレア号がまだ夢のようなとき、ポリネシア航海協会の設立者たちは、このカヌーで伝統の航海をするには、計器を使わずに自然が教えてくれるものを頼りに航海できるナビゲーターが必要だということに気がつきました。ハワイにはもうそのような技術を持つナビゲーターがいませんでした。しかし、彼らはパパマウと呼ばれていたマウ・ピアイルクさん（ミクロネシアのサタワル島の出身）を紹介してもらえることになりました。そして彼がホクレア号の最初のナビゲーターとなりました。



ホクレア号のタヒチへの処女航海



タヒチに到着したホクレア号



ホクレア号を歓迎するタヒチの人々



航海するホクレア号

彼は、“あなたたちの夢を乗せてホクレア号をハワイ人の遠い昔の故郷、タヒチへ連れていく”と承諾して下さりまして、1976年、処女航海に出ました。ハワイを出てから30日を過ぎたころ、パパマウがタヒチを見つけたのでした。

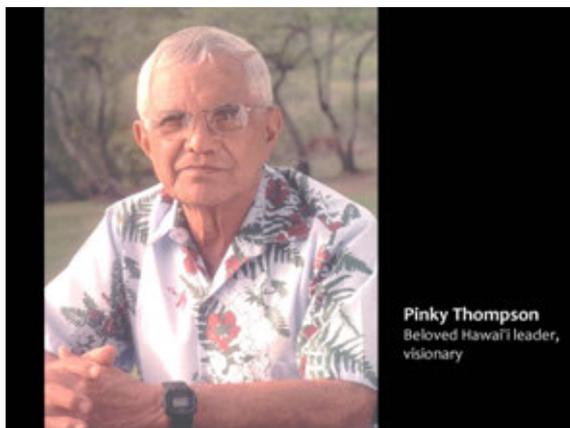
タヒチに到着したとき、1万7,000人ぐらいのタヒチの人々が歓迎して下さいました。数字については諸説ありますが、こんなにすごい群衆が集まっているの私は見たことがありません。ホクレア号がタヒチにたどり着いたことは、私達が祖先から語られてきた航海の物語に息吹を吹き込んだ瞬間だったと思います。1970年代は私達にとってハワイのルネッサンスと呼ばれている時代です。

ホクレア号は、このハワイのルネッサンスの中で大変大きな位置を占めていると思います。その他にもハワイ諸島にあるカホオラベ島の爆撃訓練をやめさせることや、ハワイ語を取り戻そうとすることも同時に起こっていました。また、ハワイだけではなくポリネシア全体がホクレア号のおかげで自分たちの誇りを取り戻しました。我々は一体誰なのか、どこから来たのかという誇りを取り戻したのです。

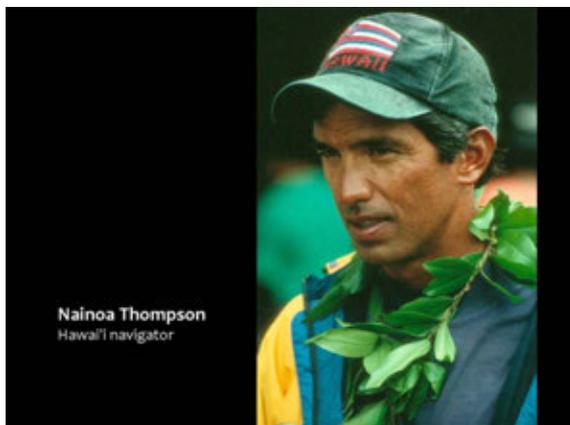
最初は大変な時期もありました。ホクレア号がタヒチに着いたころ、それは大きな成功ではあったのですが、同時に課題も抱えることになりました。長い話しですが、パパマウがサタワル島に戻るようになってしまいましたので、ホクレア号の帰路は計器を使って帰ったという結果になりました。



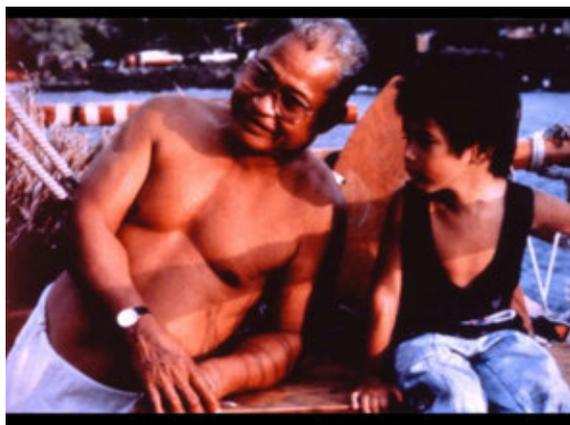
ホクレア号クルー故エディ・アイカウ



ホクレア号の航海を訴えたピンキー・トンプソン



ホクレア号の航海師を志したナイノア・トンプソン



その2年後の1978年、この航海をもう一度やろうということになりました。しかし、ホクレア号は転覆し、クルーメンバーの一人であるエディ・アイカウを失いました。彼はとても有名なウォーターマンとして知られていました。聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、今では「エディ・アイカウ」という彼の名を冠した40フィート以上の波が来た時にしか開催されないサーフィンコンテストも行われています。エディは、転覆したホクレア号のクルーとホクレア号そのものも救うために自ら犠牲になったわけです。彼はホクレア号に私達ハワイ人にとってもものすごく大切な“誇り”というものを見ていたのではないかと思います。だから彼は彼がいつも行っていること、人々の命を守り、カヌーを守ったのでした。

1978年にそういう悲劇があつて、ハワイの人たちがバラバラになってしまった時期もありました。そのとき、ピンキー・トンプソンという人物、彼もまた偉大な人物でしたが、ホクレア号が航海をせず博物館にお蔵入りをしてしまうのであれば、何の意味があつたんだ、と語るようになりました。彼らの世代はそのような結末でホクレア号を終わりにすることはできませんでした。

そして、彼の息子であるナイノア・トンプソンがパパマウのところに行って、航海術の教を請うことになりました。またタヒチまで連れていってもらうのではなく、ハワイ人として自分たち自身でタヒチを見つけるための航海術を教えてください。先生としてパパマウが必要だといいました。そしてパパマウはまたホクレア号に戻ってきてくれました。

2年ぐらいの間、ナイノアはパパマウと勉強しました。非常に古典的なやり方でやったのですが、このような学習の期間を経て、1980年、ナイノアはホクレア号をタヒチの周航に導くことができました。パパマウがナイノアに教えたものは非常に大きなも



1980年のホクレア号の航海



1985年、アオテアロアに



1999年、ラパヌイに



2004年、パパハナモクアケアに

のがありました。しかし、ナイノアは彼が持っていた自身の現代的な知識とパパマウが教えてくれたテクニックを融合した、ハイブリッドな形の航海術というのを確立しました。ですから私達、ナイノアから学んでいるナビゲーター訓練生はパパマウと全く同じやり方というわけではないのですが同じ航海術を現在学んでいます。1980年の航海も非常に素晴らしい成功となりました。ナイノアが何世紀もの時を経て初めてハワイとタヒチを周航させたハワイ人ナビゲーターになりました。そのあとホクレア号はポリネシアの主要な島々に航海しました。

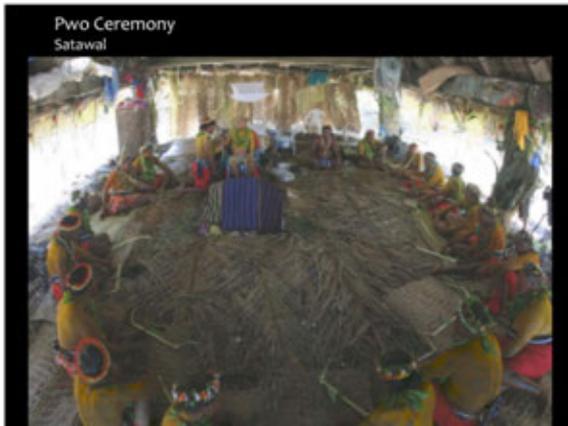
1985年にアオテアロア（ニュージーランド）、1999年にラパ・ヌイ（イースター島）にも訪れました。

ラパ・ヌイは、ホクレア号が最後にたどり着いた主要な島で、ポリネシアの最も南東端にある島です。

その後にまた北東の島に戻ったのですが、2004年にはハワイ諸島の北西に位置し、国定記念物になっているパパハナウモクアケアに行くことができました。



2007年、マウの故郷のサタワルに



正式なナビゲーターになるためのポウの儀式



ポウを受けた5人のナビゲーター



沖縄に向かったホクレア号

そして、2007年にはマウの島へ行きました。私たちにとってはマウの故郷はとても遠くて架空の島のように思っていたのですが、彼の島へ航海することはとても大切なことでした。また、マウへのお礼としてのカヌー、アリンガノマイス号も建造して、共に航海しました。ホクレア号とアリンガノマイス号はマーシャル諸島を経由し、ミクロネシアの島々を訪れ、ついにサタワル島に辿りつきました。マウはいろいろなことを何年もかけて私達に教えてくれただけではなく、また新しいプレゼントを私達に与えてくれました。

ハワイ出身の5人のナビゲーターに正式なナビゲーターとなるためのポウの儀式を行ってくれたのです。ポウの儀式では、ミクロネシア出身の11人も同時に儀式を受けることになりましたが、ハワイ人がこの儀式に参加したのは初めてのことでした。

これが5人のポウを受けたナビゲーター達です。ナイノア・トンプソンのことはご存知だとは思いますが、今では彼だけでなく、何人ものナビゲーターがいます。彼らのほとんどは沖縄、日本にも航海しました。

サタワル島を出た後は、ミクロネシアの島々に寄り、ヤップ島から沖縄へ向かいました。



2007年、沖縄で歓迎をうけるホクレア号



日本各地を回るホクレア号



広島宮島を訪れるホクレア号



ホクレア号、ハワイへの帰路

2007年4月に沖縄に到着しました。2人の日本人が参加したのですが、ヤップ島から沖縄に行く間、日本の文化についていろいろ教えてくれました。また、サバニの文化についてもいろいろ教えてくれました。ハワイと沖縄の類似性についても学ぶことができました。

沖縄の後、日本各地を訪問しましたが、内田さんがそれについてはお話しされると思いますので、私のほうでは簡単に写真だけお見せしたいと思います。

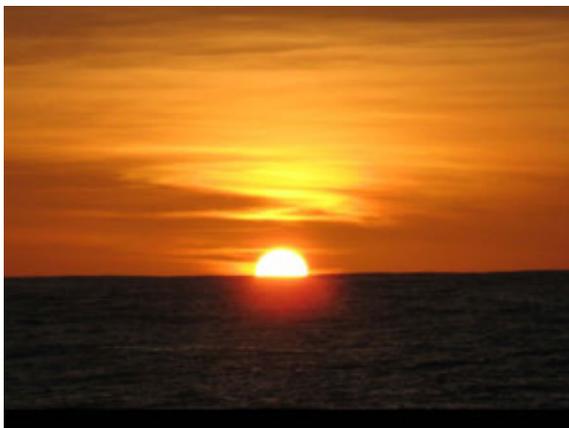
日本にいる間、ポゥを受けたナビゲーター達と一緒にいましたが、ホクレア号で世界一周をしてはどうかという話を出したのです。日本の島々を訪問しているとき、はっきりしたのが、ホクレア号にはそれだけの価値がある。そして平和へのメッセージを伝えることもできる。沖縄、日本にもそのメッセージを伝えたので、そのような価値観を、日本も越えて世界中に伝えることができるのではないかという考えを話したわけです。



少なくとも 11 艘の航海カヌーが南太平洋にある



スターコンパスでナビゲーションを学ぶ



ナビゲーションのために自然を学ぶ・太陽



ナビゲーションのために自然を学ぶ・風

ハワイに戻ってから、過去 30 年、ホクレア号と一緒に何を学んだのかを考えました。その 30 年の間にホクレア号の子孫とも言えるほかの船もたくさん造られました。少なくとも 11 艘が造られております。今後も建造される予定です。世界中を回る旅というのは、ハワイにとってだけではなく、ポリネシアの家族、ミクロネシアの先生たちに対する恩返しでもあります。

私達が何を学んだかを考えると、私達の先生、パパマウに戻ります。少しナビゲーションについて触れさせてください。なぜなら、この旅が可能なのはナビゲーションがあるからです。

ナビゲーターは自然の手がかりに頼るわけです。太陽、月、星、そして気象、風が強いのか、弱いのか、空の色、そして鳥、そういうものに常に注意を払っていかなくてはなりません。今の時代ではコンピューターを見ていることが多い私たちですが、ナビゲーションを学ぶというのは外に出て、自然の中にいることを強いられ、実際何が自分の周りで起きているのかというのをよく注意することが必要です。ナビゲーションの美しさというのは、それ以外にも私たちの誇りというものを取り戻す作業でもあります。私達の祖先は素晴らしい冒険家でした。何千年も前、周りの自然だけに頼って何千キロもの海を航海しました。このような学びは非常に素晴らしいものです。周りに注意を払うことで環境に対する意識というものが深まり、感謝の気持ちを持つことができます。



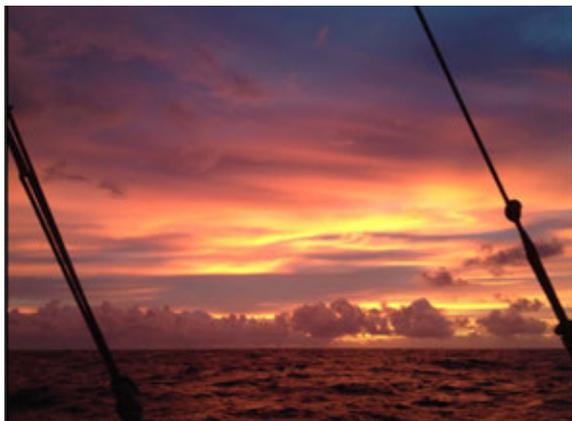
ナビゲーションのために自然を学ぶ・空の色



ナビゲーションのために自然を学ぶ・気象



ナビゲーションのために自然を学ぶ・気象



ナビゲーションのために自然を学ぶ・気象



ナビゲーションのために自然を学ぶ・海鳥



今、世界周航するホクレア号

カヌーというのは島を象徴するようなものだと思います。そして、生・死というものにも非常に敏感になります。大きな大陸に住んでしまうとそういう繊細さを失っていくかもしれませんけれども、そのような意識、そして環境に対する気持ちというものを持つことができます。



ホクレア号の日本人クルー（内田 沙希さん）

この世界周航は島や環境に対する意識に加えて、次世代の船長やナビゲーターを育てるためのものでもあります。ホクレア号にはたくさんの生徒たちが乗船しています。ハワイだけではなく、太平洋のいろいろな島々からです。日本からのメンバーもいます。（内田）沙希さんは、私たちの世界一周航海に参加してくれました。



衛星電話で子どもたちとつながる

それから、航海中に子どもたちと衛星電話でつながるということも行っています。子どもたちの探究心や観察力に刺激を与え、港に入ったときには、その島の子ども達に航海のことやナビゲーションの教えについて話させてもらう機会も作っています。



就航先でのワークショップ活動

それから、その島の人たちと希望を分かち合うために、いろいろな話を聞かせてもらいます。その中には、ビーチをきれいにしたり、海をきれいにしたりしているグループもありました。



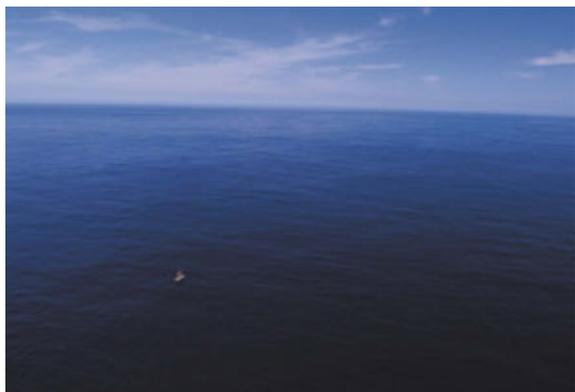
子どもたちとクリーンアップ活動

この写真はハワイですが、子どもたちを自分たちの住む地域でのクリーンアップ活動に参加させていたりしています。子どもたちに自分の住んでいる場所、地球を大切にするということを学んでほしいからです。



就航先で文化交流

それから、この旅を通して文化の交流も行いました。日本で気がついたように、バリや南アフリカなどの場所でも、私達は違うところより、似たところの方が多くに気がつきました。それに気が付けたことはとても価値があります。このような人々との関係がこの旅を航海というものを超えた何かしてくれるのです。



ホクレア号の航海はつづく

カヌーでの旅というのは、子どもたちにとっても重要なものだと思います。彼らが今後の地球を背負っていくわけですから、今現在旅をしている私達のためでなく、未来の子ども達のためなのです。子ども達が自分に誇りを持ち育つこと、ハワイやほかのところでもそうですけれども、自分で意識して選択をしていく、互いを支え合い、互いから学び合う能力を身につけさせる必要があります。ホクレア号は縫



ホクレア号は世界をつなぐ縫い針

い針のようなものだという人がいます。世界をつなぐ縫い針なのです。この航海の後、ホクレア号はどこに向かうのかということも、お話しする予定でしたが、また北太平洋にも戻るとい話もでています。航海の文化、歴史というものをホクレア号が生きるものにすると言えるでしょう。

ご清聴ありがとうございました。